慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	國民主義と國際主義(竹林熊彦譯, 同文館發行)
Sub Title	
Author	高橋, 琢二(Takahashi, Takuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.149(455)- 149(455)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

國民主義と國際主義（竹林熊彦譯 同文館發行）

國民主義と國際主義乃至それらの運動は、近世史に重要なる位地を占めてゐる事象であるとともに、將來の問題としても重要である。竹林氏が此の譯書を出されたことは、我が讀書界に對する誠によき寄與であると云はねばならぬ。原著はマンチエスター大學史學教授 Ramsay Muir 氏の Nationalism and Internationalism: the Culmination of Modern History で、一九一六年の刊行である。此等の觀念なり運動なりの本質と、その過去に於ける發展とを檢討し、且つ兩者の關係を說明したものであつて、著者は國際主義の將來に大なる期待を有する人であり「力ある國民主義の基礎の上に於てのみ實行され得る國際主義が實現される」との見解を執る人である。興味と暗示とに富む書であると思ふが、此處では左に著者の國民なるもの及び國民性なるものに關する思想の一端を紹介するに止めておく。

本書の一節に曰ふ「國民性とは定義し難き、把握し難き思想である。獨逸の大學教授の好んで用ゐる形式によつて、吟味されたり、分析されたりすることが出來ぬ。野蠻なる種族主義によつて解釋されてはならぬ。其の根柢は一種の情感である。最後の手段として、國民は國民である。彼等國民すべてが熱情的に一致して國民なりと信ずるが故にと云ふより外はない。然し彼等は若し彼等の間に眞の有力なる親和力が存するなれば、若し彼等が形成せる混和種族間に人爲的の分離によつて離反することかなければ、若し彼等が共通の宗教信仰によつて植ゑつけられて根本的な道德思想を共有するなれば、若し彼等が傳統の共同繼承を光榮とするなれば、彼等は國民たるべきことを信じ得る」と。從來國民及び國民性を論じた學者——主として 政治學者公法學者——はかゝる說明を下さなかつた。全く態度を異にしてゐると云はねばならぬ。國民とは如何なるものかとの問題に就いて、諸學者の意見は必ずしも一致してをらぬが、要するに國民と認むべきものゝ具有すべき要件に就いての見解の相異であつた。しかし何れも人民の間に共通の言語が行はれると云ふことは缺くべからざることゝしてゐるが、ムイア氏は之をも必要と限つてゐないのである。兎に角面白い見解であると思ふ。

なほ本譯書には國際關係論（James Bryce: International Relations. New York, 1922）國際運動史（Albert Léon Guérard: A Short History of the International Language Movement, London, 1922）の二篇が附錄せられてゐる。何れも興味ある論著である。（高橋琢二）

文化移動論（西村眞次著 エルノス出版）

常に新しき試みをもつて清新なる刺戟をわが史學、人類學の上に與へつゝある西村教授は、今般また『文化移動論』を公にせられた。文化の發生については從來學者の間に異說があり、或論者は國家や民族の文化が各獨立に發達したものと考へ、或論者は人類が一の起原から發達した如く文化もまた或一つの起原から分岐發達したと說いた。前者を文化獨立起原說と稱すれば、後者を文化